

## 英国 NGS オープンガーデンにおける自己目的性とチャリティー意識

○ 下山田 翔 [東海大学大学院 体育学研究科] 萩 裕美子 [東海大学体育学部]

キーワード：NGS オープンガーデン，自己目的性，チャリティー意識

### 1.はじめに

イングランドとウェールズでは、ナショナル・ガーデン・スキーム（以下 NGS）主催のオープンガーデンが毎年行われる。これは、庭園主が自身の私的な庭を公開し、自由に庭を鑑賞してもらう催事である。NGS オープンガーデンは5月から7月に集中して行われる。年間で3700以上の庭園が公開されるが、誰でも庭園を公開できるわけではなく、NGSの審査を通過した庭園のみが公開を許される。1927年にNGS設立とともに正式に創始されたこの催事は、NGSのかつての母体組織である、女王の看護協会(QNI)によって養成された女王の看護婦たちの退職金を工面するためのチャリティー事業として始まり、入場料や茶菓から得た収益を寄付に回す制度は現在も変わっていない<sup>1)</sup>。当初、寄付先はQNIのみであったが、現在は5つの看護・医療関係団体、2つの庭園保護団体とナショナルトラストに対して寄付が行われる。いつ、どこで、どんな庭園が公開されるかといった情報は、専門のガイドブックである「イエローブック」から得ることができる。

公開される庭園には富裕者が所有する大規模で華美な庭園が少なくないことから、T.ヴェブレンが提唱した顕示的閑暇・顕示的消費<sup>2)</sup>の性格が強いようにも思えるが、明らかにはなっていない。相田(2002)は、英国 NGS オープンガーデンについてその歴史とシステムについてまとめたが<sup>3)</sup>、“なぜ NGS オープンガーデンに取り組むのか”についてや、その“レジャーとしての性格”について取り扱った研究はない。

### 2.目的

本研究の目的は、NGS オープンガーデンのレジャーとしての性格を検討すること、ならびに、庭園主がオープンガーデンに取り組む動機を把握することである。

### 3.方法

フィールドワークを主な研究手法とする。2011年5月18日と19日に2庭園2庭園主、2011年8月7日と8日に5庭園4庭園主に対して、対話式インタビューとオープンガーデンの観察を行った。補足情報の収集にはロンドンウェルカム図書館に所蔵されている女王の看護協会議事録(1926~1976)と同協会年次報告書(1977~1997)を参照した。

#### 1) 対話式インタビュー

インタビューでは、以下の質問項目を対話の中に組み込んだ。

- ① 通算公開回数
- ② 1人で庭を手入れしているのか
- ③ 庭園維持の作業の頻度
- ④ 他の庭園主と情報交換をするか

### ⑤ オープンガーデンに取り組む動機

これらは、いずれもガイドブックからは得られないデータである。質問は、「⑤オープンガーデンに取り組む動機」に対する回答を得ることが核心であるため、①～④までの項目を対話の中に組み込み、漸次的に中心論点に迫るよう心掛けた<sup>4)</sup>。また、フィールドワークにおいてインタビューの機会は場所とタイミングを選ばず突然訪れ、会話の流れを妨げないことも重要であることから、すべてのインタビューにおいてすべての質問項目を質問できたわけではない。庭園主に対しては、研究目的で来訪したことは伝えたが、研究内容についての詳細な説明は避けた。

### 2) 観察

観察は庭園主、来訪客、庭園自体を対象として行い、以下の観点に関する質的データを得ることを目的に行なった。

- ・ オープンガーデン中に庭園主や来訪客がどのような活動をしているか。
- ・ オープンガーデンの雰囲気はどのようなものか。どのような演出がなされているか。

### 3) サンプルング

サンプルングは、パットン(Patton 2002)の提唱する質的研究におけるサンプルング戦略を参考に、目的志向的に行なった<sup>5)</sup>。以下がパットンのサンプルング戦略(太字)と、それに対応した実際のサンプルング(アンダーライン)である。

- ・ **極端な事例や典型的な事例を選択する**

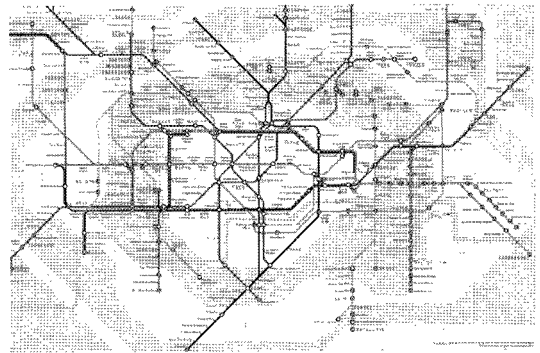
→ 調査地域をロンドンに限定する

3700 以上公開される庭園のうち、今年度においてロンドンの庭園は 274 と全カウンティのうち最も多い<sup>6)</sup>。一番オープンガーデンが盛んな地域であり、その性格が最も顕著に表れる地域だと解釈し、調査地域をロンドンに限定した。

- ・ **サンプル内で最大の多様性を目指す**

→ 鉄道網における ZONE の分けを基準に選択する

ロンドンの鉄道は料金体系として ZONE という制度を採用している。ロンドンの中心部を ZONE①とし、そこから同心円状に ZONE8 まで分けされている(図 1 参照)。ZONE②~⑥の庭園を選択することで、出来る限り地域性に偏りをなくした。ZONE①は商業地区であるため公開している個人庭園が少ない、ZONE⑦,⑧は公開している庭園が少ない、アクセスに困難といった理由からそれぞれ除外した。



(図 1)

- ・ **利便性の基準を採用する**

→ 交通網の発達したロンドンに限定

NGS オープンガーデンはその多くが土日に公開される。週末にいかにか効率よく多くの庭園を訪問するかが重要であるため、移動に時間がかからないよう交通網の発達し

た地域を選択する必要があった。

## 5.調査結果

### 1) 動機付けとしてのチャリティー

インタビューの結果、動機やオープンガーデンに取り組む目的について、「チャリティーのため」と回答した庭園主は6名中3名だった。その他にも、2名の庭園主がチャリティーの制度についてコメントした。チャリティーは庭園主にとって関心事であることがうかがえると同時に、動機として捉えている庭園主もいることが分かった。しかし、オープンガーデン全体としてチャリティーの性格が強く表出しているわけではない。観察から、オープンガーデン中の人々の行動としては「歓談」が目立って多いことが確認できた。これは紅茶やワインなどの軽飲食を伴うものも少なくない。NGS オープンガーデンはチャリティーのためだけに行われているのではないのだと印象付けられた。

### 2) 自己目的的活動としての NGS オープンガーデン

庭園主へのインタビューにおいて、動機についての回答でチャリティーの次に多かったものは、「それ自体のために取り組む」である。2名の庭園主がこのように回答した。それぞれのインタビューにおいて、会話のテーマは異なったが、庭を人に見せることを通じて来訪客と価値を共有すること、日常的な作業に関する説明、庭園に植えてある草花の解説などがそれぞれの庭園主における話の要旨である。それぞれ魅力を感じる点は異なるようだが、NGS オープンガーデンにおける活動以外に魅力を感じていると説明する庭園主はいなかった。これらの会話の後に、本研究（インタビュアー）が「オープンガーデン自体のためにオープンガーデンに取り組んでいるのですか。」と要約的に問いかけると、2名の庭園主は「そうです。」と同意の意を示してくれた。うち1名は、「(NGS オープンガーデンに取り組む)理由はない。」とも回答した。動機についての質問をした際に庭園主から受ける印象としては、困った表情を浮かべるものが多く、あまり“なぜNGS オープンガーデンに参加しているのか”といったことについては普段は考えていないのだと解釈できる。

来訪客の視点から考察すると、NGS オープンガーデンにおいては演出された時間と空間ということを感じさせられる。茶菓やアルコール類の提供や音楽隊の演奏、サロンなどのくつろいで歓談できる場所の確保などが印象的だ。もちろん草花を愛でることも重要な楽しみの一つである。楽しみ方は様々であるが、人々を楽しませ、喜ばせるような創意工夫はいたるところに観察できた。

## 6.対外目的性と自己目的性

インタビューと観察の結果を要約すると、庭園主はチャリティーを NGS オープンガーデンに取り組む動機として挙げつつも、庭園主や来訪客は NGS オープンガーデン当日に行われる活動、当日に至るまでの過程など自体に楽しみを感じていると推察できる。

NGS オープンガーデンにおけるチャリティー、具体的には諸団体への寄付行為は対外的な活動であり、自分以外の人のためにする活動であると同時に、NGS オープンガーデン以外への報酬を目的としている。一方、“NGS オープンガーデン自体のために参加する”、つまり“それ自体のために行う (for its own sake)”<sup>7)</sup> といった性格は活動自体に目的を内包する、自己目的的な活動に当てはまる<sup>8)</sup>。チャリティーという対外目的性と“それ自体の

ためにやる”という自己目的性が共存していることが、レジャーとしてのNGSオープンガーデンの特筆すべき性格である。

## 7. 寄付制度

NGS オープンガーデンは、停滞期を経てきたものの、基本的には成長路線を歩み、現在では庭園公開数 3700 以上、寄付総額 250 万ポンド以上を計上している。対外的目的性と自己目的性という相反する性格を内在しながらも、NGS オープンガーデンは崩壊することなく 84 年間継続している。ここで、“破たんせずに継続してこれた理由”が新たな論点として挙げられる。

上述した通り、寄付金は合計で 8 つの団体に配分される。8 団体への配分率は 75% である。残りの 25% は ACNO (Additional Charity Nominated by Owner) という制度にもとづき、庭園主が自分の望んだ寄付先に直接収益を寄付することができる<sup>9)</sup>。寄付先として多いのは、地域の協会や医療機関など、自分に身近な存在で、ゆかりがある団体や機関である。

NGS オープンガーデンが人々をひきつけるのは、まずはそれが楽しいからであると推測される。それ自体を楽しむことが動機であるし、換言すれば、それ自体を楽しめるような演出がされている。しかし、チャリティーも決して形骸化してしまっていない。ACNO という特徴的な制度によって、庭園主は自分の収益がどこに寄付されたかを知ることができ、それによって寄付活動の実感を得る。レジャーとしてオープンガーデンを楽しみつつも、これに内包された形でチャリティーも存在感を失うことがないのである。

## 8. まとめ

NGS オープンガーデンは対外的目的と自己目的性の共存に成功しているレジャーのひとつであることがわかった。相反する性格を内在するにもかかわらず継続してこれたのは、それ自体のために楽しむことができるような催事としての性格を発展させつつも、ACNO という特徴的な寄付制度により庭園主に寄付の実感を与え、内包的にはあるがチャリティーを形骸化させることなく維持してきたことにあると推察された。

## 引用・参考文献

- 1) NGS ホームページ : <http://www.ngs.org.uk/>
- 2) T. ヴェブレン, 有閑階級の理論, ちくま文庫
- 3) 相田 明(2002), 英国と日本におけるオープンガーデンの発祥と展開
- 4) ウヴェ・フェリック(1995), 質的研究入門, 春秋社
- 5) Micheal Quinn Patton(2000), Qualitative Research & Evaluation Methods 3<sup>rd</sup> Edition, SAGE Publications
- 6) THE YELLOW BOOK 2011,
- 7) de Grazia(1962), OF TIME WORK, AND LEISURE, KRAUS REPRINT
- 8) M, チクセントミハイ(1979), 楽しみの社会学, 新思想社
- 9) Records of the Queen's Nursing Institute, WELLCOME TRUST

日本レジャー・レクリエーション学会 第41回学会大会  
ポスター発表

■会場 教養教育棟 21号教室

ポスター会場オープン時間 10:20~15:00  
質疑応答(発表者配置時間) 11:00~12:00

- P-1 戦後における全国レクリエーション大会に関する研究  
○加藤秀治 [日本大学大学院]  
澤村博 [日本大学]
- P-2 占領下のレクリエーション活動について  
○樋水 万衣子 [日本大学]  
△澤村 博 [日本大学]
- P-3 戦前の日本の厚生運動に対するドイツ・イタリアの影響に関する研究—機関誌『厚生』を中心に—  
○中濱 健 [日本大学]  
△澤村 博 [日本大学]
- P-4 子育て中の母親のQOLの向上(2)  
—エアロビックダンスの運動強度に注目して—  
○松永須美子 [南九州短期大学]  
松永 智 [宮崎大学]
- P-5 遊びと文化の融合—オランダの遊園地エフテリン  
グの事例—  
○石川 恭 [愛知教育大学]
- P-6 市町村合併による広域スポーツ空間の再構築に関する基礎研究(2)  
○浜田雄介 [広島市立大学]  
迫俊道 [大阪商業大学]  
服部宏治 [広島国際大学]
- P-7 レクリエーションがもつ有効性の再考—レクリエーションの本質と大学生が認識するレクリエーションとの違いに焦点を当てて—  
○中山正剛 [別府大学短期大学部]  
山本浩二 [津山工業高等専門学校]  
神野賢治 [金沢星稜大学人間科学部]
- P-8 都市地域に住む大学生を対象とした里山地域への関心について—福島県鮫川村里山景観保全活動の参加者・非参加者の比較—  
○石塚裕樹 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-9 里山における自然学習のための子ども向けプログラム・しおりの制作  
○伊藤亜美 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-10 千葉県花見川における音環境の調査・分析  
○石崎 遥 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-11 多摩川の写真コンテスト応募作品からみた撮影者の風景の捉え方に関する考察  
○浅井美里 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-12 日本の自然観・風景観の変遷に関する考察  
○中村拓也 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-13 神社参道の曲折とその角度に関する研究  
—東京都世田谷区内の神社を事例として—  
○福田俊介 [東京農業大学]  
△栗田和弥 [東京農業大学]
- P-14 福島県相馬市の小学生を対象とした「みちのく夏の冒険エコキャンプ」の企画・立案および実践  
○栗田和弥 [東京農業大学]  
伊藤亜美 [東京農業大学]  
鈴木広子 [財団法人都市緑化機構]  
小川陽一 [財団法人都市緑化機構]  
川嶋 舟 [東京農業大学]